Japan Foundation for
Regional Art-Activities

地域創造レター

News Letter to Arts Crew

6月号—No.290
2019.5.25
（毎月1回25日発行）

【二人静（ふたりしずか）】渋い赤紫色。

能『二人静』に由来した色名。源義経の愛妾である静御前の霊に取り憑かれた乙女が、静の霊とふたりで舞うときに着る装束（かつて静が着用していたもの）が赤紫色であることからこの色名が生まれた。ちなみに、舞姿の美しさから名付けられた、二人静、一人静という名前の植物もある。

●目次／*contents*

今月のニュース …… *2*
令和元年度「公共ホール音楽活性化事業」全体研修会報告

財団からのお知らせ …… *4*
「地域創造フェスティバル2019」開催のお知らせ／令和元年度「地域創造大賞（総務大臣賞）」募集開始時期について／令和元年度「公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業」参加者募集／「公立文化施設の管理運営状況に関する事例調査研究」報告書作成のお知らせ／「市町村長特別セミナー」報告／令和元年度「リージョナルシアター事業」研修会報告

今月の情報 …… *7*
地域通信

制作基礎知識シリーズ Vol.45 …… *10*
変わる文化庁と文化政策①　京都移転と文化芸術基本法の成立

今月のレポート …… *12*
岩手県花巻市　萬鉄五郎記念美術館「萬鉄五郎と歩んだ35年」

発行元：一般財団法人地域創造
〒107-0052 東京都港区赤坂2-9-11
オリックス赤坂2丁目ビル9F
Tel. 03-5573-4183　Fax. 03-5573-4060
URL: http://www.jafra.or.jp/

●令和元年度「公共ホール音楽活性化事業」全体研修会

事業への期待が高まる充実した研修に

令和元年度
公共ホール音楽活性化事業全体研修会
2019年4月22日～24日

写真
左上：平成30・令和元年度公共ホール音楽活性化事業登録アーティストによるプレゼンテーション。酒井有彩さん（ピアノ）
右上：同じく登録アーティストの泉真由×松田弦（フルート、ギター）
左下：セレノグラフィカによるダンスワークショップ
右下：「おんかつを知るVol.3～事例紹介編～」（左から山本若子さん、塚越慎子さん、花田和加子さん）

●平成30・令和元年度公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト
- 岡田奏（ピアノ）
- 酒井有彩（ピアノ）
- 中野翔太（ピアノ）
- 田中拓也（サクソフォン）
- 糸賀修平（テノール）
- 山本奈央（オカリナ）
- 泉真由×松田弦（フルート、ギター）
- アーバンサクソフォンカルテット（サクソフォン四重奏）

●公共ホール音楽活性化事業に関する問い合わせ
芸術環境部　永田・佐藤
Tel. 03-5573-4069

令和元年度公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）の参加団体やコーディネーター、登録アーティストが一堂に会する全体研修会が、4月22日から24日まで地域創造会議室とHAKUJUホール（東京都渋谷区）を会場にして開催されました。今回の研修会では、2年目となる登録アーティスト（平成30・令和元年度）8組による公開プレゼンテーションに加え、今年度の事業に参加する担当者を対象にしたワークショップやレクチャーが行われました。

●おんかつの基礎を学ぶ講座

初日の研修では、公共ホール現代ダンス活性化事業登録アーティストのセレノグラフィカ（隅地茉歩＋阿比留修一）によるコミュニケーション・ワークショップが行われました。ペアになって身体を使うワークなどで心と身体を開放した参加者たちは、おんかつについて学ぶ基礎講座や実際の現場を学ぶ事例講座に臨みました。

事例講座では、平成28年度にテューバ奏者の喜名雅さんを招いた関市文化会館の長尾哲男さん（関市教育委員会）が登壇。市内2カ所の中学校でのアウトリーチや、小中学校の教員と教育委員会の職員の理解を得るための取り組み、演奏会の取り組みについて学びました。

テューバの演奏会という特殊な公演だったため、コーディネーターのアドバイスを受けて、チラシには“テューバが主役”という大きな文字と普段とは雰囲気の違うアーティスト写真を使い、アウトリーチの実施校など遠隔地から来やすいようにバスの路線図を掲載。関係者の理解を得るために行ったいわゆるインリーチにも大きな効果があったとか。長尾さんは、「この事業をやるのは大変ですが、でも、本当にやりがいがあります」と話していました。

また、演奏家から学ぶ事例講座では、平成28・29年度登録アーティストとして全国8地域でおんかつ事業を行ったマリンバ奏者の塚越慎子さんが登壇。JA職員を対象にしたアウトリーチで地元の野菜や果物について織り込んだ茨城県鉾田市、特別支援学校でのアクティビティを実施した京都府舞鶴市の取り組みについて学びました。

「アクティビティでは、音楽に馴染みのない人にどうしたら興味をもってもらえるかを考え、

地域の情報を取り入れるなどの工夫をしています。私たちが地元を理解したいと思っていることが相手に伝わり、距離が縮まったと感じたときはとても嬉しかったです。障がいをもつ子どもを対象にしたアクティビティでは、下見のときに、子どもたちの詳細を確認し、手づくり楽器を持参するなど、それぞれが音楽体験できるよう工夫しました。まずは演奏家に要望やアイデアを伝えていただいて、一緒に考えていければと思います」

●演奏家の個性溢れる公開プレゼンテーション

2日目には2年目となった平成30・令和元年度登録アーティスト8組による公開プレゼンテーションが行われました。トップバッターは、昨年度のプレゼンでオカリナの演奏楽器としての可能性・表現力を披露して注目された山本奈央さん。今回は高音のエネルギーを感じてほしいという『夜の女王のアリア』などを披露しました。

平成30・令和元年度には中野翔太さん、岡田奏さん、酒井有彩さんという3名の実力派のピアニストが登録されています。そのトップを切った中野さんは、ニューヨーク留学時代にジャズも勉強したという技巧派で、ジャズのテイストを織り交ぜたリストの『愛の夢』などの演奏を披露しました。15歳から12年間、フランスに留学していたピアノの岡田さんは、ショパン、ドビュッシー、ラヴェルというピアノ曲の王道を演奏。なかでも小悪魔が飛び回るベルトランの詩集からラヴェルが着想した難曲『スカルボ』の演奏は圧巻でした。昨年はオール・ショパン・プログラムだった酒井さんは、「音楽から広がる想像の世界を旅してもらいたい」とサン=サーンス『白鳥』のピアノ・ソロ版とチェロ版を弾き比べてイメージの違いを表現しました。

フルート＆クラシックギターの泉真由さんと松田弦さんは、磨きのかかった軽妙なトークで会場を沸かせていました。「昨年度は、古民家で肩を寄せあって演奏したり、ふるさとをテーマに絵本作家とコラボしたり、聴覚障がいの子どもに骨伝導でフルートを体感してもらったり、とても感動しました」と泉さん。

アーバンサクソフォンカルテットは、「ソプラノからバリトンまで、楽器が役割を交替しながら協力して演奏するのがサクソフォン四重奏の醍醐味です」とアピール。また、昨年同様、言葉を失ったオペラ歌手というトリッキーな登場をしたテノールの糸賀修平さんは、「歌詞が外国語でも音楽や演技でいろいろなことが伝わります」と実演し、圧倒的な声量で会場を魅了していました。また、サクソフォンの田中拓也さんは、『G線上のアリア』を即興パートを交えて演奏。「動物をテーマにした曲で子どもたちと一緒にストーリーづくりもしています」と、持ち前の温かい雰囲気で会場を和ませていました。

個性的な登録アーティストによるおんかつは今年の秋以降に本格的に始まります。近くで開催される取り組みをぜひ視察していただければと思います。

●令和元年度「公共ホール音楽活性化事業」参加団体一覧（全12団体）
- 北海道帯広市（帯広市民文化ホール）
- 福島県国見町（国見町観月台文化センター）
- 埼玉県吉見町（吉見町民会館 フレサよしみ）
- 千葉県酒々井町（プリミエール酒々井）
- 東京都羽村市（羽村市生涯学習センターゆとろぎ）
- 富山県氷見市（氷見市いきいき元気館）
- 静岡県御殿場市（御殿場市民会館）
- 愛知県田原市（田原文化会館）
- 奈良県奈良市（なら100年会館）
- 島根県奥出雲町（横田コミュニティセンター）
- 福岡県久留米市（久留米市城島総合文化センターインガットホール）
- 佐賀県佐賀市（佐賀市立東与賀文化ホール）

●令和元年度「公共ホール音楽活性化事業」全体研修会スケジュール

	4月22日（月） 地域創造 会議室	4月23日（火） HAKUJUホール	4月24日（水） 地域創造 会議室
10:00		「おんかつから始まるホールと地域の未来」 大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所）	「グループ別企画検討」 小澤櫻作、丹羽徹、花田和加子、山本若子
11:00			
12:00		「フィードバック～これまでのゼミを振り返って～」 「プレゼンテーションの聴き方」 小澤櫻作、丹羽徹、花田和加子、山本若子	
13:00	開講式 「ワークショップ」 セレノグラフィカ（隅地茉歩＋阿比留修一）		「企画発表」 小澤櫻作、丹羽徹、花田和加子、山本若子 「フィードバック」
14:00		平成30・令和元年度登録アーティスト 公開プレゼンテーション •山本奈央（オカリナ） •中野翔太（ピアノ） •泉真由×松田弦（フルート、ギター） •アーバンサクソフォンカルテット（サクソフォン四重奏） •糸賀修平（テノール） •岡田奏（ピアノ） •田中拓也（サクソフォン） •酒井有彩（ピアノ）	
15:00	「おんかつを知るVol.1～基礎編～」 小澤櫻作 「おんかつを知るVol.2～実務編～」 地域創造		閉講式
16:00	「おんかつを知るVol.3～事例紹介編～」 Ⅰ. 平成28年度事例 長尾哲男（岐阜県関市）、丹羽徹 Ⅱ. 演奏家事例 塚越慎子、花田和加子、山本若子 Ⅲ. 事業担当者の役割とは 三浦幸恵		
17:00			
18:00			
19:00		交流会（～21:00）	

財団からのお知らせ

●地域創造フェスティバルに関する問い合わせ
芸術環境部　青井・渡辺・菅・山本
Tel. 03-5573-4093

●「地域創造大賞(総務大臣賞)」に関する問い合わせ
総務部　西山
Tel. 03-5573-4164

●令和元年度「公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業」
[日時]2019年8月29日(木)、30日(金)
[会場]京都コンサートホール　アンサンブルホールムラタ
[参加申し込み方法]ウェブまたは往復はがきにてお申し込みください。
•京都コンサートホール公式サイト応募フォーム:
https://www.kyotoconcerthall.org/subscription3
•はがき:京都コンサートホール事業企画課「アウトリーチセミナー」担当宛
〒606-0823　京都市左京区下鴨半木町1-26
※整理番号は、ウェブでお申し込みの方にはメールで、往復はがきでお申し込みの方には返信はがきで随時お知らせします。

●「公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業」に関する問い合わせ
芸術環境部　仕田
Tel. 03-5573-4078

●「調査・研究事業」に関する問い合わせ
芸術環境部　三田
Tel. 03-5573-4066

●「地域創造フェスティバル2019」開催のお知らせ(7月30日、31日)

地域創造が取り組んでいるさまざまな事業を紹介し、公共ホールや自治体が事業を企画・実施する上で参考になる情報を提供することを目的に、「地域創造フェスティバル2019」を東京芸術劇場(豊島区西池袋1-8-1)で開催します。予定しているプログラムは以下のとおりです。

◎シンポジウム「2021年以降の地域社会とこれからの公立文化施設―少子高齢化、福祉と向き合う劇場・ホールの事例から」
◎公共ホール音楽活性化支援事業(おんかつ支援)のプレゼンテーション・セミナー
◎公共ホール現代ダンス活性化事業(ダン活)のプレゼンテーション
◎令和2年度「地域の文化・芸術活動助成事業」および「地域伝統芸能等保存事業」の助成要綱に関する説明会
◎令和2年度「リージョナルシアター事業」に関する説明会
◎令和2・3年度「公立美術館活性化事業」に関する説明会
◎都道府県・政令指定都市文化行政担当課長会議

また、各日ともに情報交換会を設けており、アーティストや他の公共ホール等とのネットワークづくりや情報交換の場としてもご活用いただけます。

昨年度のフェスティバルには、300名を超える方々が全国各地から参加し、今後の事業計画の参考となる情報の入手に役立てておられました。

出演者情報等のプログラム詳細および参加者募集につきましては、次号(7月号)でご案内します。皆様のご参加をお待ちしております。

●令和元年度「地域創造大賞(総務大臣賞)」の募集開始時期について

地域創造大賞(総務大臣賞)は、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに特に功績のあった公立文化施設を顕彰し、全国に広く周知することにより、公立文化施設の活動の更なる活性化を図り、美しく心豊かなふるさとづくりの推進に寄与することを目的としており、平成16年度から30年度までの15年間で116施設が受賞しました。

実施要領・応募書については、5月下旬に当財団のウェブサイトに掲載する予定です。多くのご応募をお待ちしております。

●令和元年度「公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業」(京都市開催)参加者募集

京都コンサートホールでは、2019年4月より登録アーティスト制アウトリーチ事業がスタートしたこともあり、「公共ホールとアウトリーチ活動の未来」と題し、公共ホールとして果たすべき役割とアウトリーチ活動の可能性についての研修会を8月29日、30日に開催します。

専門家による講演「①社会における芸術の役割～京都を例に(建畠哲)」「②アウトリーチから始まる地域の活力創出(吉本光宏)」「③地域のアーティストと公共ホール～新潟の取り組みから(榎本広樹)」「④アウトリーチのいま～研究的観点からみえる現状と課題(梶田美香)」やパネルディスカッション、演奏家によるアウトリーチデモンストレーションなどを行います。

アウトリーチ事業などに関心のある公共ホールや、文化行政ご担当者等の参加を募集しますので、この機会にぜひご参加ください。事前登録制となりますので、参加を希望される方は、京都コンサートホール宛にお申し込みください。
[募集期間]6月10日～8月23日
※応募多数の場合は先着順

●「公立文化施設の管理運営状況に関する事例調査研究」報告書を作成しました

「公立文化施設の管理運営状況」をテーマに、6つの異なる管理運営形態の文化施設を対象として、個別に事例調査を行いました。公立文化施設の管理運営形態には、それぞれメリット・デメリットがあるなかで、設置者たる地方公共団体の目的意識や地域特性に合わせ

てベストな管理運営形態を選択することが重要であることを示すものと考え、その実態や背景に焦点を当てようとヒアリングによる事例調査を実施しました。報告書は当財団ウェブサイトに掲載しています。

◎調査対象

【直営】長久手市文化の家(愛知県長久手市)
【直営(制度導入後に直営に変更)】城崎国際アートセンター(兵庫県豊岡市)
【指定管理・非公募(財団)】滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール(滋賀県大津市)
【指定管理・非公募(NPO法人)】白河文化交流館(福島県白河市)
【指定管理・公募(財団)】JMSアステールプラザ(広島市)
【指定管理・公募(民間事業者)】山梨県立県民文化ホール(山梨県甲府市)

●平成30年度「公立文化施設の管理運営状況に関する事例調査研究」報告書
当財団ウェブサイト「出版物・報告書」→調査研究報告書
http://www.jafra.or.jp/j/library/investigation/new/index.php

●「市町村長特別セミナー」に関する問い合わせ
芸術環境部　仕田
Tel. 03-5573-4078

●「市町村長特別セミナー」報告～全国の市町村長等51名が参加

毎年全国の市町村長等を対象に、文化・芸術による地域づくりへの理解を深めていただくために開催している「市町村長特別セミナー」が、4月18日、19日に千葉市の市町村アカデミーで開催されました。今回は1日目に財団の事業紹介およびその一環としておんかつ支援登録アーティストによるミニコンサートを実施し、2日目に当財団理事であり、演劇界のオピニオンリーダーとして各界で幅広い活躍をされている平田オリザさん(劇作家・演出家、青年団主宰)による講義が行われました。

◎ミニコンサート

今回登場したのは、ヴァイオリンの早稲田桜子さん(平成18・19年度登録アーティスト)とピアニストの早稲田眞理さん姉妹です。桜子さんはおんかつを契機に全国で数多くのアウトリーチを実践してきたエキスパート。名曲『愛の挨拶』に始まり、ヴァイオリンの一番太い弦(G線)のみを使って演奏する『G線上のアリア』、多彩な奏法が楽しめる『中国の太鼓』、一番好きだというバッハの『無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第1番よりアダージオ』など計6曲を披露しました。

一番細いE線とG線の聞き比べ、小学校ではクラス全員にやってもらっているというヴァイオリンの演奏体験(2名の首長が実際にチャレンジ)など、ナチュラルな人柄で市町村長との壁を取り払い、音楽によるリラックスした交流を実現。最後はみんなの笑顔で締めくくるというアウトリーチの効用を実感したパフォーマンスになりました。

◎「本気の文化によるまちづくり～豊岡市の挑戦」

今年度には劇団の拠点を兵庫県豊岡市に移すことを発表している平田さんからは、1時間半にわたる示唆に富んだ講義が行われました。特に時間を割いて解説されたのが、2020年から始まる大学入試改革についてでした。四国学院大学で学長特別補佐を務め、2010年度に演劇コースを開設した平田さんのリアルな取り組みに市町村長は熱心に耳を傾けていました。

「2021年春から行われる大学入学共通テストで『知識・技能』『思考力・判断力・表現力』に加え、『主体性・多様性・協働性』を評価する準備が始まっています。四国学院大学は小さな大学ですが、すでに前倒しで改革しています。例えば、入試ではチームに別れてレゴブロックで巨大な艦船をつくる。どういう艦船が出来たのかではなく、つくる過程で自分の主張を論理的、具体的にメンバーに説明できたかや、自分の役割を自覚して担えたかを見ます。本四架橋のうち2本を廃止するという要請に対して、受験生が利害の対立する各県代表になり、コンピューターで情報収集しながら議論する入試問題もあります。うちだけでなく、学ぶ力、友達と一緒に議論する力を問う入試を始めているところがたくさんあります。大学の授業もアクティブラーニングにシフトすることが求められていますが、それに学生が対応できるには、フランスの社会学者・哲学者のピエール・ブルデューのいう文化資本のひとつ、身体的文化資本(センス、マナー、コミュニケーション能力、美的感覚など)が重要になる。しかし、これは子どもの頃から培わないと身に付きません。都市と地方では、この身体的文化資本の格差が開く一方です。地方ほど、文化政策と教育政策を一体にして格差を解消する努力をする必要があります。演劇はこうした身体的文化資本の育成にとても有効だと考えています」

こうした現状認識に立ち、平田さんは文化政策担当参与を務める豊岡市への移住を決めるとともに、演劇による人材育成を行う「国際観光芸術専門職大学(仮称)」の構想に学長予定者として関わっており、2021年4月の開校を目指しています。

「これまで豊岡市では全小中学校で演劇によるコミュニケーション教育を行ってきましたが、但馬地域の全高校でもスタートします。地域とともにある大学として学生たちはフェスティバルで実践的に学ぶなど、地域と積極的に関わります。地域で人口が減少するのは、仕事がないからではなく、つまらないからです。教育政策と文化政策を一体でやり、面白いまち、出会いのあるまちをつくり、Iターンの切り札にしたいと思っています」

講義の後、市町村長の皆さんが上気しているように感じるほど、心に響いた講義となりました。

上：平田オリザさん／下：首長もヴァイオリン演奏を体験された早稲田姉妹によるミニコンサート

財団からのお知らせ

●令和元年度「リージョナルシアター事業」研修会報告

令和元年度リージョナルシアター事業の参加団体と派遣アーティストが集まりワークショップやディスカッション、打ち合わせを行う研修会が、4月15日(月)、16日(火)の2日間にわたって当財団事務所にて開催されました。今回は、今年度参加する5団体(秋田県能代市、京都府、愛媛県松山市、大分県九重町、宮崎県門川町)から7人の事業担当者が参加し、交流を深めるとともに当事業の趣旨や可能性を共有する2日間となりました。

地域の課題やホールの展望などを踏まえながら、住民等を対象にしたワークショップや学校へのアウトリーチを行う当事業では、派遣アーティストと参加団体が協働しながらプログラムをつくり実施していきます。今回の研修では、地域・ホールのやりたいことや抱える問題意識を派遣アーティストと共有するための相互の対話がさまざまな場面で行われました。

初日はまず、アドバイザーの内藤裕敬さんによるレクチャーとワークショップが行われました。「どんな演劇を面白いと思うか?」という内藤さんの質問から始まったレクチャーでは、ワークショップを実施していくうえでの重要なキーワードとして「想像」が挙げられました。その後、参加者全員で実際にワークショップを体験。モナリザの絵に新たなタイトルを付けてみる、音楽を聴いてイメージに合う絵を選ぶ、など、「想像で遊ぶ」ことに焦点を当てたワークを行うことで、レクチャーで話されたことをより実地で感じてもらうことができました。

続いて「事例紹介&座談会」と題し、昨年度実施の茨城県牛久市、埼玉県秩父市から担当者をお招きし、事業実施の成果や苦労、今後の展望などをお話いただくとともに、アーティスト、参加者も交えてざっくばらんに質問や意見を交換し合いました。牛久市、秩父市ともに今年度もワークショップ事業を継続する予定であることから、リージョナルシアター事業を一過性のものにしないためにどういったことを考えて取り組んだのか、という話も聞くことができ、参加者たちは事業実施後についても思いを巡らせることになりました。

2日目は前日のオリエンテーションを踏まえて、派遣アーティストと参加団体による企画打ち合わせが行われました。それぞれのミッションや課題をもとに、その地域ならではのプログラム実現に向けて熱心な話し合いがグループごとで行われ、最後には現時点での計画や事業実施後の展望についての発表がありました。宮崎県門川町の岩切義樹さんは「研修会を受けて、自分が固定概念にとらわれていることに気付いた。自由な考えで、町の人や自分がわくわくすることを企画したいと思います」と意欲を語ってくれました。その後、派遣アーティストと参加団体による個別の打ち合わせを行い、2日間の研修を締めくくりました。

1・2. 内藤裕敬さんによるレクチャーとワークショップ　3. 事例紹介&座談会　4. 派遣アーティストとの打ち合わせ

●令和元年度「リージョナルシアター事業」
◎派遣アーティスト
•多田淳之介(東京デスロック主宰、演出家・俳優)
•田上豊(田上パル主宰、劇作家・演出家)
•有門正太郎(有門正太郎プレゼンツ主宰、演出家・俳優)
•福田修志(F's Company代表、劇作家・演出家)
•ごまのはえ(ニットキャップシアター代表、劇作家・演出家・俳優)
◎アドバイザー
•内藤裕敬(南河内万歳一座座長、劇作家・演出家)
•岩崎正裕(劇団太陽族主宰、劇作家・演出家)
◎参加団体
•秋田県能代市(能代市文化会館)
•京都府(京都府立けいはんなホール)
•愛媛県松山市(松山市総合コミュニティセンター)
•大分県九重町(九重文化センター)
•宮崎県門川町(門川町総合文化会館)
◎問い合わせ
芸術環境部　藤原・山本・勝田
Tel. 03-5573-4124

地域通信

●データの見方
情報は地域ブロック別に、開催地の北から順に掲載してあります。●で表示してあるのは開催地です。☜マークが付いている事業は地域創造の助成事業です。ラインの下は、事業運営主体、住所、電話番号、担当者名の順に記載してあります。色帯部分が事業名で、以下、内容を紹介しています。

●地域ブロック
[北海道・東北]北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
[関東]茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川
[北陸・中部]新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知
[近畿]三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
[中国・四国]鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知
[九州・沖縄]福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

●情報提供先
ファックス、電話、e-mailでお願いします。
Fax. 03-5573-4060　Tel. 03-5573-4183
letter@jafra.or.jp
地域創造情報担当　児島・三田

●2019年8月号情報締切
6月3日(月)

●2019年8月号掲載対象情報
2019年8月～10月に開催もしくは募集されるもの

地域創造ウェブサイト「人材ネットバンク」掲載情報募集中
当財団ウェブサイト内に以下の情報を掲載するページを設けています。
◎公共ホール等の求人情報
◎公共ホール等で実施する人材育成研修の開催情報
掲載・申込方法など詳細はウェブサイトをご覧ください。　http://www.jafra.or.jp/

北海道・東北

●札幌市
札幌市芸術文化財団
〒064-0954　札幌市中央区宮の森4条12
Tel. 011-642-5709　山田のぞみ
http://www.hongoshin-smos.jp/

砂澤ビッキ―樹―展
北海道を主な拠点として活動し、木を素材に作品をつくり続けた彫刻家・砂澤ビッキの没後30年を機に開催する展覧会。残された数多くの作品の中から、1960年代後半から70年代のこれまであまり紹介されることが少なかった“工芸的な”作品を中心に構成。同時期に札幌芸術の森美術館でも連携企画として「札幌美術展 砂澤ビッキ―風―」が開催され、さまざまな角度からビッキを知ることができる。
[日程]4月27日～6月30日
[会場]本郷新記念札幌彫刻美術館

●青森県青森市
青森公立大学国際芸術センター青森
〒030-0134　青森市大字合子沢字山崎152-6
Tel. 017-764-5200　金子由紀子
http://www.acac-aomori.jp/

石田尚志展「弧上の光 Light on the Arc」
ドローイング・アニメーションの手法を用いた映像作品で著名な石田尚志の展覧会。国際芸術センター青森に滞在し、弧を描いた特徴的な形をしたギャラリー空間の構造と光を取り込んで制作した新作も発表するとともに、平面を曲線で切り出して組み合わせた彫刻作品を初めて展示する。最終日には、哲学者・美学者の星野太との対談や敷地内でのライブパフォーマンスも実施。
[日程]4月20日～6月16日
[会場]国際芸術センター青森

●福島県いわき市
いわき市立美術館
〒970-8026　いわき市平字堂根町4-4
Tel. 0246-25-1111　江尻英貴
http://www.city.iwaki.lg.jp/artmuseum.html

見て・考えて・表現して　体験！いわ美　～コレクションによるアートプログラム～
体験型の現代アート展覧会。来館者が現代アート作者の意図や制作技法を体験できる。作品を“見て”、そこから“考え”、言葉や制作により“表現する”というアートプログラムの体験により、展示作品を単純に見るだけでは味わえない、達成感や満足感が得られる。ピカソやシャガール、ミロなど所蔵作品70点を展示。
[日程]6月8日～7月7日
[会場]いわき市立美術館

関東

●茨城県水戸市　☜
水戸市芸術振興財団
〒310-0063　水戸市五軒町1-6-8
Tel. 029-227-8111　櫻井琢郎
https://www.arttowermito.or.jp/

アフター・ザ・シアトリカル・デイズ『ECTO』
音楽家・渡邊琢磨が監督・脚本を手がけた幻想怪奇映画の上演。本作にも出演する俳優の染谷将太が監督を務めた短編映画『清澄』に着想を得て水戸市植物公園で撮影され、映像作家TAKCOMによる抽象映像を織り交ぜ作品化。渡邊の指揮により13名の弦楽アンサンブルがサウンドトラックを生演奏する。環境音や効果音も上演中にミックスされ、単なる映画とは違い実演芸術として映像と音が劇場内でクロスオーバーする。
[日程]5月25日、26日
[会場]水戸芸術館

『ECTO』
©2019 MITO ARTS FOUNDATION

●栃木県宇都宮市
栃木県立美術館
〒320-0043　宇都宮市桜4-2-7
Tel. 028-621-3566　石田友里
http://www.art.pref.tochigi.lg.jp/

画中のよそおい
美術作品に表現されたファッションについて紹介する展覧会。所蔵品のほか、装身具をモチーフとした作品を制作している栃木ゆかりの美術作家・齋藤千明による作品も展示される。当時の社会経済や文化を映し出した装いや、画中の人々の服を着る・脱ぐ行為、身体と衣服の関係性にも着目し、作品の中のファッションがつむぐ物語をひも解く。
[日程]4月20日～6月16日
[会場]栃木県立美術館

●千葉県習志野市
習志野文化ホール
〒275-0026　習志野市谷津1-16-1
Tel. 047-479-1212　深野有里
http://narabunh.jp/

サロン・コンサート　オン・ステージ28 東京トリオ・ダンシュ
2001年から続く、地元在住の元NHK交響楽団首席クラリネット奏者・横川晴児がプロデュースする室内楽のコンサートシリーズ。今回は荒木奏美(オーボエ)、スタン・ジャック(ファゴット)、長尾洋史(ピアノ)を迎える。客席を使わずステージ上に150席のみを設置し、演奏家の息遣いも感じられる近さで、お話も交えたアットホームな演奏会を楽しめる。
[日程]6月22日
[会場]習志野文化ホール

●東京都大田区

大田区文化振興協会
〒146-0092 大田区下丸子3-1-3
(大田区民プラザ内)
Tel. 03-3750-1611　田沼里奈
https://www.ota-bunka.or.jp/

アプリコお昼のピアノコンサートVol.61

若手ピアニストに演奏機会の提供、また地域貢献を目的として、2008年から始まったコンサートシリーズ。昨年から、より裾野を広げるためオーディション制を取り入れ、選ばれたピアニストたちは「フレンドシップ・アーティスト」として、文化振興を盛り上げる役目を担う。今回出演する石川美羽は大田区出身。地元の人材発掘にも貢献している。
[日程]5月29日
[会場]大田区民ホール・アプリコ

●東京都調布市

調布市文化・コミュニティ振興財団
〒182-0026　調布市小島町2-47-1(調布市グリーンホール内)
Tel. 042-481-7611　藤堂文子
http://chofumusicfestival.com/cmf2019/

調布国際音楽祭2019

2013年より調布発の国際音楽祭として発展を続け、多彩なプログラムを展開する音楽祭。オーディションで選りすぐりの若手が集う名物企画「フェスティバル・オーケストラ」には、シンガポールの音楽大学生が初めて参加する。また劇場付近の屋外や駅周辺のカフェなど、調布のまちを会場にしたコンサートが無料で開かれ、誰もが気軽に音楽を楽しむことができる。
[日程]6月23日～30日
[会場]調布市グリーンホール、調布市文化会館たづくり、深大寺ほか

●東京都町田市

町田市立博物館
〒194-0032 町田市本町田3562
Tel. 042-726-1531　矢島律子
https://www.city.machida.tokyo.jp/

**町田市立博物館最終展
―工芸美術の名品―**

開館45年を迎えた町田市立博物館は、本展をもって現在の建物での展示事業を終了。市では当館のガラスや陶磁器などの工芸美術のコレクションを中心に展示する(仮称)町田市立国際工芸美術館の開館に向けて準備を進めており、45年間の“これまで”を振り返るとともに、“これから”を新施設へバトンタッチしようという企画。
[日程]4月20日～6月16日
[会場]町田市立博物館

●横浜市

神奈川芸術文化財団
〒220-0044　横浜市西区紅葉ケ丘9-2
Tel. 045-263-2567　井上はるか
https://www.kanagawa-ongakudo.com/

オープンシアター2019

神奈川県民ホール、神奈川県立音楽堂、KAAT神奈川芸術劇場の3施設で同時開催される体験プログラム。建築デザインを保存するための改修工事完了後初公開となる音楽堂では、名建築を特徴づける建築技術を子どもたちにも楽しく知ってもらえるよう、ホワイエの床に施されているテラゾーを題材にした石みがき体験などさまざまなワークショップが開催される。
[日程]6月1日、2日
[会場]神奈川県民ホール、神奈川県立音楽堂、KAAT神奈川芸術劇場

●横浜市

横浜みなとみらいホール
〒220-0012　横浜市西区みなとみらい2-3-6
Tel. 045-682-2020　鈴木慶子
http://www.yaf.or.jp/mmh

**ハチャトゥリアン・コンチェルツ
～チェロ、ピアノ、ヴァイオリンのための3つの協奏曲を一気に聴く一夜**

『剣の舞』などで知られる作曲家ハチャトゥリアンの3つの協奏曲(チェロ、ピアノ、ヴァイオリン)を一気に楽しめるコンサート。館長の池辺晋一郎が企画・監修し、プレトークも行う。神奈川フィルハーモニー管弦楽団と共に川瀬賢太郎(指揮)、石坂団十郎(チェロ)、佐藤卓史(ピアノ)、郷古廉(ヴァイオリン)と今が旬の演奏家たちが出演。
[日程]6月28日
[会場]横浜みなとみらいホール

北陸・中部

●富山県黒部市

黒部市美術館
〒938-0041　黒部市堀切1035
Tel. 0765-52-5011　尺戸智佳子
https://www.city.kurobe.toyama.jp/category/page.aspx?servno=79

**この世界で生きる、日々のかたち
―桂樹舎の民藝品とともに―**

富山の伝統工芸「八尾和紙」の製造業等を営む桂樹舎所蔵の民藝品と、北陸を中心に活躍するセシル・アンドリュ、野村瑞穂、宮永春香の作品を紹介する。桂樹舎の設立者・吉田圭介が蒐集した紙資料やさまざまな国の民藝品と現代の作品を併せて紹介することで生まれる作品同士の共鳴や、使用用途や意味を超えて形の面白さ・美しさをきっかけとした鑑賞を投げかける。
[日程]4月20日～6月23日
[会場]黒部市美術館

野村瑞穂《objects》(2016年／陶土ほか)
撮影：京角真裕

●長野県長野市

長野市文化芸術振興財団
〒380-8512　長野市大字鶴賀緑町1613
Tel. 026-219-3100　湯田美明
https://www.nagano-arts.or.jp/

**長野市芸術館
ジャズ・フェスティバル2019**

地元ミュージシャンたちと芸術館による実行委員会が企画したジャズ三昧の2日間。各日に昼の部・夜の部があり、昼は主に市内で活動するミュージシャンによる渾身の演奏を楽しむことができ、夜は峰厚介や佐藤允彦、本多俊之ら日本ジャズ界のレジェンド・アーティストによるスペシャルライヴとなっている。
[日程]6月1日、2日
[会場]長野市芸術館

●長野県原村

八ヶ岳美術館(原村歴史民俗資料館)
〒391-0115　諏訪郡原村17217-1611
Tel. 0266-74-2701　塚崎美歩
http://www.lcv.ne.jp/~yatsubi1/

**間島秀徳　アース・ダイビング
―Earth Diving―**

「キネシス」(とめどなく流れ続けるもの)をテーマとした壮大な水景を感じさせる抽象的な作風で知られ、信州大学で教鞭を執る現代日本画家・間島秀徳の個展。八ヶ岳山麓～諏訪湖を一望する高地に想を得た新作のほか、近作を展示する。円筒や屏風状の画面に描かれた大作と、村野藤吾設計によるドーム型の天井や展示壁が特徴的な空間との共鳴も見どころのひとつ。
[日程]4月6日～6月30日
[会場]八ヶ岳美術館(原村歴史民俗資料館)

●静岡県富士市

富士山かぐや姫ミュージアム
〒417-0061　富士市伝法66-2

Tel. 0545-21-3380　木ノ内義昭
http://museum.city.fuji.shizuoka.jp/

富士が見守る交流の道—古代東海道と富士山ジャンクション

奈良時代に都と東国を繋ぐ街道として整備された東海道は、各地方の役所を結ぶネットワークとしての役割を果たしていた。本展では、駿河・伊豆の国府・郡家とその関連遺跡等を紹介し、古代東海道のルートを推理する。さらに、富士山周辺地域が、東山道から甲斐を経由して東海道に繋がる結節点「古代東海道・富士山ジャンクション」として発展した可能性についても考える。
[日程]3月21日～6月16日
[会場]富士山かぐや姫ミュージアム

●愛知県豊田市

豊田市美術館
〒471-0034　豊田市小坂本町8-5-1
Tel. 0565-34-6610　都筑正敏
https://www.museum.toyota.aichi.jp/

世界を開くのは誰だ？

リニューアルオープンを記念し、近現代の美術・工芸・デザイン等幅広い分野のコレクション約150点で構成する展覧会。「世界を開く」をキーワードに、この大きな課題に挑む表現の数々を「身体」「日常」「歴史・記憶・社会」「まだ見ぬ世界」といった4つのテーマで紹介。出品作家のひとりである加藤翼は、映像作品を本展に合わせたインスタレーションとして発表する。
[日程]6月1日～30日
[会場]豊田市美術館

近畿

●大阪府能勢町

能勢人形浄瑠璃実行委員会
〒563-0341　豊能郡能勢町宿野30（浄るりシアター内）
Tel. 072-734-3241　乾はるな
https://www.jyoruri.jp/

令和元年6月能勢浄るり月間 能勢人形浄瑠璃鹿角座公演

永い歴史をもつ「能勢の浄瑠璃」の継承、発展のため、1998年に人形・囃子を加え「能勢人形浄瑠璃」がデビュー。地域の住民や子どもたち約60人が所属する「鹿角座」として活動を続け、今回は男女の恋愛をテーマに『仮名手本忠臣蔵』など劇団レパートリー3演目が上演される。PRキャラクター（萌えキャラ）やSNSを用いて浄瑠璃を親しみやすく紹介し、新規層の開拓にも力を入れている。
[日程]6月22日、23日
[会場]浄るりシアター

●兵庫県尼崎市

兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアター
〒661-0012　尼崎市南塚口町3-17-8
Tel. 06-6426-1940　古川知可子
http://hyogo-arts.or.jp/piccolo/

兵庫県立ピッコロ劇団設立25周年記念／第64回公演『銭げば！』

設立25周年を迎えるピッコロ劇団による新作舞台。関西で活躍する劇作家・演出家で、ピッコロ劇団とは今回が初タッグとなる岡部尚子（空晴）が台本・演出を手がける。17世紀フランス古典劇三大作家であるモリエールの『守銭奴』をもとに、お金に異常な執着心を抱く父親とその子どもたちによって繰り広げられる人情喜劇を軽妙な関西弁で描く。県内中学生の鑑賞事業としても実施。
[日程]5月24日～6月2日
[会場]ピッコロシアター

●兵庫県伊丹市

いたみ文化・スポーツ財団
〒664-0846　伊丹市伊丹2-4-1
Tel. 072-782-2000　木原里佳
http://www.aihall.com

次世代応援企画break a leg

今までアイホールで上演機会のなかった意欲ある若手カンパニーをバックアップし、次代を担う若手表現者の発掘と育成を目的としている支援事業。参加団体を広く募集し、毎年2団体程度を選出して、上演機会を提供する。8回目となる今回は注目の若手演劇ユニット2組が登場。「立ツ鳥会議」が新作を、「ばぶれるりぐる」が再演作を上演する。
[日程]6月8日、9日、14日～16日
[会場]伊丹市立演劇ホール（アイホール）

中国・四国

●広島県福山市

ふくやま芸術文化財団
〒720-0802　福山市松浜町2-1-10
Tel. 084-928-1800　藤井明生
http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/r-rose/

びんごビッグバンドまつり2019

地元のビッグバンド連盟が立ち上げ、今回で28回目を迎える備後近隣で活躍するアマチュアビッグバンドが一堂に会するフェスティバル。今回は10組のバンドに加え、日本を拠点に活躍中のデビッド・マシューズ（ピアノ）とアンディ・ウルフ（サクソフォーン）を招き、熱いビッグバンドステージを贈る。
[日程]6月9日
[会場]ふくやま芸術文化ホールリーデンローズ

九州・沖縄

●北九州市

北九州市芸術文化振興財団
〒805-0062　北九州市八幡東区平野1-1-1
Tel. 093-663-6661　神田和範
http://www.kicpac-music.jp/

響ホールフェスティヴァル2019

響ホールと響ホール室内合奏団の共同企画による音楽イベント。学校・企業・商店街等と連携し、音楽を通して人との繋がりの醸成を目指す。今年は「音楽とバレエ」をテーマに、バレエ音楽にスポットを当てた「3歳からの踊る音楽会バレエ編」のほか、バレエに関するワークショップや楽器体験など、子どもから大人まで楽しめるさまざまなイベントが繰り広げられる。
[日程]6月22日、23日
[会場]北九州市立響ホール

●熊本県宇城市

宇城市不知火美術館
〒869-0552　宇城市不知火町高良2352
Tel. 0964-32-6222　浦田恭代
http://://kumamoto-museum.net/shiranuhi/

河野浅八写真展

昭和初期に活躍した宇城市出身の写真家・河野浅八の作品を18年ぶりに紹介する展覧会。旧不知火町が合併し、宇城市となってからは初めての開催となる。20歳代で単身渡米し、海外で高い評価を受けた明暗のグラデーションが豊かな風景を中心とした作品群を紹介。今回は、河野自身が焼き付けたオリジナルプリント約60点と、残されたネガをデジタル処理して仕上げた作品を展示する。
[日程]4月17日～6月2日
[会場]宇城市不知火美術館

夏休み子ども企画／フェスティバル情報求む！

7月号（6月25日発行予定）では恒例の「夏休み子ども企画／フェスティバル特集」を予定しています。下記までどしどし情報をお寄せください。

Tel. 03-5573-4183
Fax. 03-5573-4060
letter@jafra.or.jp
締め切り：6月4日（火）

●制作基礎知識シリーズ Vol.45「変わる文化庁と文化政策」

「地域文化創生本部」が意味するものとは？

制作基礎知識シリーズ Vol.45
変わる文化庁と文化政策①
京都移転と文化芸術基本法の成立

講師　山名尚志
（株式会社文化科学研究所代表）

この数年、時代の変化に応じた取り組みを進めていくため、我が国の文化行政はこれまでにない変化を遂げつつある。変化しているのは政策だけではなく、政策を担当する文化庁の組織も大胆に転換されている。

その起点は2つ。ひとつは、2016年に、内閣府の「まち・ひと・しごと創生本部」が東京一局集中の是正の観点から決定した地方への政府関係機関移転基本方針である。この方針の中で、唯一全面的な移転が決まったのが京都に移る文化庁だった。もうひとつの起点が、翌2017年、それまでの「文化芸術振興基本法」が「文化芸術基本法」に改正されたことである。後述するように、この改正は文化芸術行政についての基本を大きく見直すものだった。その結果、文化庁の京都移転も、地域に拠点を移す“引っ越し”に留まらない文化行政の大転換という役割を担うものとなった。

では、具体的に、我が国の文化行政の方向はどのように変わり、それに伴って新・文化庁の組織体制がどう変わり、どのような文化政策を展開しようとしているのか。ここでは、2回に分け、その概要を紹介したい。第1回は、京都移転と文化芸術基本法を中心に、全体像を概説する。

●「地域文化創生本部」の発足～移転を契機とした新たな政策領域の開拓

先に述べたように、文化庁の京都移転は、内閣府の地方創生政策に始まる。20年ほど前から移転を希望していた京都府からの提案などを踏まえ、文化庁は内閣府および文部科学省とともに文化庁移転協議会を設置。2016年末には具体的な方針を決定し、翌17年4月には早くも先行移転を開始した。先行部隊は40人規模（京都府・京都市等の人材含む）で、遅くとも21年度末までには長官・次官を含む全職員の7割を京都の「本庁」（旧京都府警跡地）に移転する予定となっている(*)。

先行移転の最大のポイントは、既存の部署の移転とはせず、新たに「地域文化創生本部」を発足させたことにある（組織図参照）。この本部の設置目的は、「地元の知見・ノウハウ等を生かしながら、文化庁に期待される新たな政策ニーズに対応」すること。これを実現するため、同本部には、以下の3つのグループが設置された。

①総括・政策研究グループ（本部の総括、文化に関する政策調査研究、国際文化交流等）
②暮らしの文化・アートグループ（地域の幅広い文化芸術資源の活用による地方創生、経済活性化、共生社会実現への貢献および人材育成、伝統工芸や生活文化に関する調査研究等）
③広域文化観光・まちづくりグループ（文化財等を生かした広域文化観光およびまちづくりの推進、これらに関するモデル開発等）

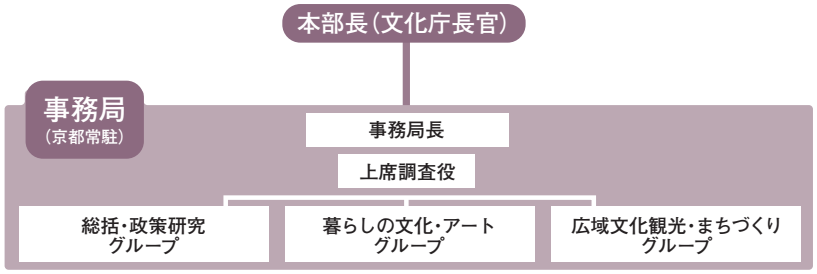
詳しくは、文化庁ホームページを参照していただきたいが、組織のグループ名には、「暮らしの文化」「文化観光」「まちづくり」といったそれまでの文化庁の文化政策ではあまり使われてこなかった用語が真っ正面から付けられている。ここからも暮らしの文化という新たな分野を対象とするとともに、観光、まちづくり等の関連分野との総合的な施策の推進による文化芸術を核とした地方創生が意図されていることがわかる。その背景になっているのが、もうひとつの起点、文化芸術基本法の成立だ。

●振興法から基本法への転換～文化芸術に“関する”施策の推進

「文化芸術振興基本法」（以下、旧法）から「文化芸術基本法」（以下、新法）へ。この改正の内容を象徴しているのが、法律名から「振興」と

＊国会対応、外交関係、関係府省庁との連絡調整、東京で行うことが必要な団体対応等の執行業務を除くすべての業務が京都に移転予定。詳しくは下記を参照。
http://www.bunka.go.jp/bunkacho/soshiki/pdf/r1389329_01.pdf

●地域文化創生本部の組織



出展：平成29年11月 文化庁地域文化創成本部リーフレット

いう言葉がなくなったことだ。新法に則って翌2018年に策定された「文化芸術推進基本計画—文化芸術の「多様な価値」を活かして、未来をつくる—(第1期)」(以下、基本計画)の整理に則って説明するなら、それは法の理念が、文化芸術について本質的価値だけでなく、その社会的・経済的価値、つまり文化芸術によって社会の強化や経済の発展がなされることについても併せて推進するものに広がったことを意味している。これに伴い、法の目的も、文化芸術の振興単体を目指すものから、「文化芸術に関する施策の推進」に変更されている。

こうした変更は、基本計画における文化芸術政策の取りまとめにも端的に示されている。文化庁の計画であるにも関わらず、「クールジャパン戦略(内閣府)」、「訪日プロモーション、文化観光資源の活用、多言語化解説整備支援(観光庁)」、「歴史・文化を活かしたまちづくり、海外日本庭園の再生(国交省)」、「障害者文化芸術活動(厚労省)」のように、他省庁の名称が付された政策が多数掲載されている。文化芸術の「推進」は、「振興」とは異なり、単体の行政分野として実施するものではなく、他分野との連携によって進められていくものとされているのだ。ちなみに新法には、こうした他分野との連携を行うための体制として他省庁を含む関係各行政機関による「文化芸術推進会議」(第36条)の設置も明記されている。

新法のもうひとつの大きな変更点が、第12条で、生活文化について「食文化」を含めることになったと同時に、その「振興」を図ることが明記されたことだ。旧法では、茶道・華道・書道などの生活文化の「普及を支援」することは定められていたが、振興にまでは立ち入っていなかった。僅か2文字の変更ではあるが、文化庁が伝統的な生活文化全体に対し振興の責任をもったということが与える影響は大きい。

ここまで見てきたように、文化庁の京都移転で誕生した地域文化創生本部は、本来の文化芸術の振興に加え、一連の「新たな政策ニーズ」に対応する推進体制として構想されたものなのだ。

●調整役としての役割と所掌事務の拡大

新法の附則(第2条)には文化庁の機能拡充に伴って必要な措置を講じると明記され、2018年10月には、それに則って文部科学省設置法の一部改正が実施された。その最大のポイントは、文化庁の所掌事務に「文化に関する基本的な政策の企画及び立案並びに推進に関すること」および「文化に関する関係行政機関の事務の調整に関すること」の2項目が明記されたことだ。これにより、文化庁が国の関わる文化行政を総合的に推進していく体制の中核に位置づけられることとなった。

これに伴い、これまで文部科学省の所管だった「芸術に関する教育に関する事務(小学校の「音楽」「図画工作」、中学校の「音楽」「美術」、高等学校の「芸術(音楽・美術・工芸・書道)」等に関する基準の設定に関する事務)等」と「博物館に関する事務(従来も文化施設としての美術館および歴史博物館の事務については所管していたが、他の類型も含め、社会教育施設としての博物館全体を所管)」の2つが文化庁に移管されることになった。

基本法で示された文化行政の範囲の拡大(文化芸術単体の振興から文化芸術に関わる施策の推進)に対応し、文化行政を効果的に実施していくためには、従来他省庁の所管であった分野を含め、文化に係わる行政全体を“横串”で調整していくことが必要となる。設置法の改正は、これを実現するための法律的な基盤を提供したものとなっている。

基本法の成立と設置法の改正。この2つにより、文化庁は単体の施策推進を主に行う立場から“文化に係わる極めて幅広い範囲の行政分野を総合的に調整する役割を担う立場”へとその位置付けを大きく変えることになった。そして、このトライアルの場こそが、京都への先行移転で誕生した「地域文化創生本部」なのだ。

●文化芸術推進基本計画—文化芸術の「多様な価値」を活かして、未来をつくる—(第1期)」
文化芸術基本法の規定に基づいて2018年3月に閣議決定されたもので、平成30年度～34年度)を見通した基本計画。
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/hoshin/index.html

●文化芸術基本法　第2条第10項
「文化芸術に関する施策の推進に当たっては、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが重要であることに鑑み、文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない。」

●文化芸術推進会議組織
- 内閣府知的財産戦略推進事務局長
- 総務省大臣官房審議官(情報流通行政局担当)
- 外務省大臣官房国際文化交流審議官
- 文部科学省大臣官房総括審議官
- 文化庁長官　※議長
- 文化庁次長
- 厚生労働省子ども家庭局長
- 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長
- 農林水産省食料産業局長
- 経済産業省商務・サービス審議官
- 国土交通省総合政策局長
- 観光庁次長
- 環境省大臣官房審議官

※推進会議の補佐をする関係課室の課室長等を幹事とする幹事会設置

＊地域創造レターは再生紙を使用しています

岩手県花巻市

萬鉄五郎記念美術館
35周年企画

萬鉄五郎と歩んだ35年

上：展覧会会場風景
下：美術館前での萬鉄五郎祭の餅まき

●萬鉄五郎記念美術館35周年企画
「萬鉄五郎と歩んだ35年」
［主催］萬鉄五郎記念美術館
［会期］2019年4月20日～6月30日

●萬鉄五郎記念美術館の歩み
1978年に町の有志で「萬鉄五郎を偲ぶ会」が開催され、翌年、正式に萬鉄五郎記念館建設委員会発足。同会では80年から町内個別募金を募り、最終的に町内外から約5,300万円を集め、建設資金として東和町に寄付。だが、町は建築推進派と時期尚早派に分かれて激しく対立し、町長選に波及。わずか30数票差で推進派が勝利したが、計画を縮小し、1階を現代美術ギャラリー、2階を記念館として84年5月1日に開館。85年に、東和町に移住してきたミュージシャンの姫神がコンサートを行い、収益金を作品収集のために寄附。86年には時期尚早派の町長が就任したが、活動を充実させる方針を取り、事業予算も増額した。90年に博物館法上の登録博物館認定。91年には、元岩手日報社の記者で萬の研究者でもある千葉瑞夫氏が館長に就任。92年、萬の生家にあった八丁土蔵を美術館横に移築し、ギャラリーとハイビジョンミュージアムとして活用した。95年、名称を萬鉄五郎記念美術館と改称。

東北新幹線の新花巻駅から車で10分ほど。美しい田園が広がる花巻市東和町（2006年1月花巻市と合併）の丘に萬（よろず）鉄五郎記念美術館はある。萬鉄五郎（1885-1927）は、同町の土沢地区に生まれ、大正から昭和初期にかけて前衛的な作風で日本近代美術に大きな影響を与えた画家だ。同館は、1984年に地元住民の熱烈な運動の末に建てられ、以後、住民と美術館の二人三脚で萬の顕彰と地域の活性化を行ってきた。開館から35年を迎えた現在を取材した。

●

取材日の5月3日、美術館に隣接する土沢幼稚園では「第39回萬鉄五郎祭」が開催されていた。地元住民や遺族、関係者らが集う中、中学生が萬の言葉を朗読。100年前に生きた画家の精神が中学生の身体を通して伝わってきた。

美術館で開催中の「萬鉄五郎と歩んだ35年」展では、萬作品を収集順に展示していた。そもそも開館時の収蔵作品は5点のみ。以来、住民が作品を購入しては美術館に寄託、予算が付けば町が購入。コレクションが揃うまでは、町民が技術やアイデアを持ち寄り、萬の生涯などを紹介するハイビジョン映像などを制作してコンテンツを補完。現在、遺族の協力も得て、250点余りを収蔵するまでになり、今回はその全作品を美術館の歩みや資料と共に総覧した。

この日、館の前庭は「土澤アートクラフトフェア」の工芸や食の出店で賑わっていた。現在では、駅前の商店街から美術館前まで全国から320組もの出店が集まり、6万人が来場するこのフェアも、2005年に町の有志と当時の美術館館長、学芸員が協働した「街かど美術館 アート@つちざわ〈土澤〉」がきっかけになったものだ。

86年から美術館学芸員を務める平澤広さんは、「この美術館の活動は萬作品をいかに収集するかという運動でもありました。文字どおり町民がつくった美術館なので、地元の誇りである萬の顕彰、彼の精神である前衛的な美術家の発掘と育成、町民と一体化したまちを元気にする活動という3つのミッションを大切にしてきました。当時は岩手県立美術館（2001年開館）も存在せず、県内唯一の公立美術館としての役割も求められており、岩手の美術史を掘り起こし、作家に光を当てることも行ってきました」と振り返る。

現代美術の紹介、岩手の美術家を研究して再評価する展覧会は全国でも注目され、東和町に移住する彫刻家や画家も現れるようになった。一方、人口は減り、商店街も空店舗が目立つようになる。アートでまちが活性化できないだろうか、と企画されたのが美術館、支援組織の鉄人会、土澤まちづくり会社、住民ボランティア約300名が手を携えた「街かど美術館 アート@つちざわ〈土澤〉」（2005年10月）だった。

1カ月にわたり130名もの公募アーティストが空店舗から生活空間まで77カ所でインスタレーションを展開。移住していた彫刻家の菅沼緑さんが招待アーティストに声を掛けるとともに、町民の絵画や手芸品も展示した。「美術館が思う良い作品を、観客に一方的に見せるだけでは人々に美を判断する力がつかない。まちに隙間なく無審査でAからZまで多様な作品を展示し、見歩いて観客が自分なりの見方を獲得してもらえればと考えました」と平澤さん。

街かど美術館は、以後足かけ10年にわたり趣向を変えながら計6回開催。その合間に始めたクラフトフェアが多くの来場者を集めたことから、現在の土澤アートクラフトフェアへと繋がっていった。実行委員会代表の武政文彦さんは、「街かど美術館は2014年を最後に休止しましたが、萬鉄五郎や街かど美術館が町の誇りや個性を育ててきたことは間違いありません。東北の小さなまちでも挑戦する反骨精神を萬はもっていましたし、クラフトフェアも次の挑戦をしなければと思っています」と語る。

最後に「地域の価値を美術の側面から発掘し、全国・世界に向けて発信することは地域美術館の使命です。このバトンを次の世代に渡すことが今の課題です」と言った平澤さんに、地域美術館を支えてきた学芸員の矜持を見る思いだった。地域住民と美術館が互いに相手に向けてできることはないかを考え、実行する幸福な関係が岩手の小さなまちに根づいていた。

（アートジャーナリスト・山下里加）